

はじめに

愛は人類最大のテーマである。とくに近代は、愛を語ることばにあふれてきた。愛の過剰を語るにせよ、欠如を語るにせよ、あるいは愛とは逆の憎悪を語るにせよ、何らかの形で愛について触れずには、おそらく近代の歴史を語ることは難しいだろう。

愛と言っても、性愛とは限らない。より広く、他者や世界に対するほのかな好感、興味、ときにはふとした視線や気安いちよつかいなどを含めた心の矢印のようなもの。これらはみな、「愛」という言葉の周辺にある。もちろん、こうした心的傾向はしばしば明確な形を持たない気分やきざしとして終わることも多い。相手や状況がよきものであるように、楽しい、心地よいものであるようにと願う心情である点でこれらは共通するが、それを名指す言葉は、愛、愛情、思いやり、気持ち、親切……などとその深さや強度に応じ、また文脈に合わせて使い分けられてきた。

本書では、このような態度をニュートラルかつ包括的に実際の行為とからめてとらえるのに、「善意」という語を中心に立てる。人々はしばしば善意を共有することで事を起こしてきた。近代の歴史を振り返れば、奴隷解放にしても、フランス革命やアメリカ独立戦争にしても、女性解放運動にしても、動物愛護運動にしても、あるいは近年の環境保護運動にしても、少なくとも表向きは、何らかの

形で「善意の論理」が看板となってきたのである。多くの法や団体やシステムが「よかれ……」との願いを実現するために作られてきた。

だから、ほんとうはもつとうまくいくはずだった。

しかし、善意ほどその運用が難しいものはない。そもそも善意とはどこから始まり、どこで終わるのだろう。幸あれ、と願う気持ちそのものを指すのが本来の意味だとしても、実際には善意は——あるいは気持ちにしても、思いやりにしても、愛にしても——はつきりした形を与えられ、物質や制度となり、富や身分や国家とかかわりながら何らかの結果を生んではじめて認知される。つまり、心の奥底にあるだけでは不十分。何らかの表現を与えられてはじめて善意は善意となる。

ただ、ここには微妙に矛盾がある。善を願う気持ちは、心の奥に秘匿されて保持されるべきものだという考え方もある。穏やかに、静かに、でも、しっかりと隠し持たれるのが正しい善意だという見方である。私たちはそうした善意に安心するし、それが適切な姿だと信じている。ことさらに掲げられた善意はどうも信用できない。いかがわしい。何か裏がありそうな気がする。大音量で熱弁を奮う政治家の言葉はたしかに善意を表明しているが、そのやり方があまりに宣伝的かつ要求的で（「あなたの一票を！」）、ほんとうはこちらの利益よりもあちらの利益が優先されているのではないかと考える。激しい押しつけがましい口調のせいで、まるで初めから信用されることなど期待していないかのようでもある。

困ったことである。たしかに隠し持たただけの善意では意味がないと私たちはわかっている。何らかの形でその在処を知らされたい。恩恵に浴したい。実益が欲しい。ところが厄介なことに、あまりに明瞭に示された善意には鼻白む。何だか胡散臭い。あやしい。嘘じゃないか、と思う。人の心は

実にややこしい。

*

善意をめぐるこうした機微にもっとも敏感だったのが、近代のイギリスだった。一七世紀から一九世紀にかけてのイギリスでは、善意がデリケートな貨幣のようにやり取りされた。善意をいかに示すかで人の「品性」が露わになり、ときには善意の授受が政治的な権力とも結びついた。だから新興生産階級は、封建的な制度の中で成り上がるために必死に善意の扱い方を勉強したのである。

おもしろいのは、この時代、言葉もまた貨幣のように流通し始めていたということである。英語は一五世紀から一六世紀にかけて多くの外来語を取り入れ、語彙を豊かにしたが、まだまだ文法などの規範は確立していなかった。それがようやく落ち着いたのが一八世紀の半ば、ジョンソンの『英語辞書』（一七五五）が出版された頃である。スペリングと意味との関係は格段に安定した。人々は言葉の「字義」というものを信用するようになったのである。ちょうど、貨幣の額面を信用するのと同じように。

このような英語の安定化と、善意のやり取りをめぐる規範の確立とは時期を同じくして起きた。「よかれ……」という気持ちの表明は、当然ながら、言語表現と密接なつながりを持つ。人々は相手を心地よくさせるような言葉をどうすれば使いこなせるかあれこれ考え、意見を表明し、「洗練された英語」(polite English)という理念も生まれた。そこで拠り所となったのは、どのように言葉を使うのがふさわしいかを判断するための「適切さ」(propriety)の尺度だった。

立ち振る居舞いにおいては、場と状況をわきまえることが大事になる。どのように言葉を使うか、

状況を読むことが求められる。そこで適切な振る舞いを指し示すのに頻繁に使われたのが、「丁寧な」「上品な」(polite)という語だった。後にも触れるように、ポライトネスという概念は、日本的な丁寧や作法の伝統と重なるところがある。たとえば地位の高い人を立てる、プライベートなことは表に出さないとといった人間関係上のルールは、日本的な視点からも理解しやすい部分だろう。

しかし、ここには軋みも生まれていた。すでに触れたように、善意には元々あいまいで扱いの難しいところがある。表に出されすぎてもいけないし、かといって隠されている意味がない。塩梅が大事となる。よりよくあれ、幸あれ、と願うのだから、いいことばかりと思いたいところだが、現実にはむしろ逆で、善意が盛んにやり取りされればされるほど、謀略や悪意もまた蔓延し、幸福どころかイライラや嫌悪感、さらには怨恨、憎悪、裏切りなどが頻繁に発生する。

善意はさわめて言葉的に表現される。それだけに、いざこざも言葉の細部をめぐって起きることが多い。ちよつとした言葉のニュアンスが誤解を生んだり、恨みを買ったり、それに対して言葉による反撃、攻撃が続いたり。まさに言葉の戦争である。もちろんそれが言葉を超えた身体的な暴力や、ほんものの戦争につながることもある。危険きわまりない。だから、善意をどのように扱うかをめぐってさまざまな見解も表明された。近代の文学で、善意の表出をめぐるさまざまな悲劇や喜劇が描き出された背景にはこのような事情があった。

もちろん近代以前も善意は表出されてきた。友好や服従の意思が、善意という形をとることで相手に伝えられることもあった。武力や領土、農作物の寄贈など財のやり取りを通して相手に心地良さを生み出すということもよく行われた。しかし、近代から現代にかけては財の指標が変化した。かつてのような重厚長大な財よりも、より微妙で心理的な心地良さに重きが置かれるようになる。文学作品

にもそうした変化は反映された。怒濤のような言葉の横溢よりも、微妙な語りの温度、些細な言い回しなどによつて善意が伝えられるのである。

おもしろいのは、さらに時代が進むと、善意よりも悪意に近いとさえ思えるような表現が語りの中で威力を発揮するようになるということである。鋭利に切り裂く否定。逆説。冷たい沈黙。一見、とても善意とは結びつかないような表現が、回り道した形で善意の流通に寄与する。善意をめぐり、「意味」と「形」の乖離が起きたわけである。これは近代文化のあり方を考える上でも誠に興味深いことだ。むしろ、そうした乖離は、言葉の意味と形とが必ずしも一対一で対応するわけではないという問題とも深いところにつながっている。

*

本書では、近代から現代にかけてのイギリス、アメリカ、アイルランドといった英語圏の国々で、善意がどのように表現され流通してきたかを、それぞれの時代を代表する文学作品を読むことを通して考察する。善意に注目し、その表象を追うことで一種の「文学史」が立ち現れればと願っている。第1章では「英会話の起源」と題して、英語の歴史、作法の洗練、小説の隆盛などが同時に進行する中、当時流行した作法書なるものがいったいどのようなことをどのように語っていたのかを具体的に確認する。第2章ではそれにつづけて英国的作法の転換期に著され、一種のスキヤンダルをよんだ『チェスターフィールド卿の手紙』をとりあげる。たしかに読むと居心地に悪くなる本である。善意の表現がなかなか簡単にはいかないこと、ときには悪意の混淆さえ必要となることも見えてくる。しかし、女性嫌いの傾向が見える著者の繊細さには、ある意味で彼の忌み嫌った「女性性」がほの見え

るし、彼の体現した「善意の政治性」^{ポリティックス}がその後いよいよ洗練されていったことはまちがいない。

こうして作法は一八世紀に転換期を迎えた。それ以降、とくに文学作品の中では善意の扱いはつねに微妙なものとならざるを得ない。そのもつとも痛烈な表現を果たした作家の一人が、第3章で扱うジェーン・オースティンである。一見、取り澄まして品の良い人ばかりのいるオースティン小説の世界も、一皮めくれば悪意や謀略が横行する。とりわけ行間から読み取れるのは作家オースティン自身のイライラである。社会に依然しなければ生きていけないことがわかつていながら、その社会に強烈な悪意を抱いてもいたのかもしれないオースティンが、言葉を通していったいどのような攻撃を仕掛け、その攻撃の中に愛をも潜ませたのか、大いに興味が湧くところである。

こうしたイライラは一見、児童文学的な無菌世界を描いたかのような『不思議の国のアリス』にも読み取れる。著者のルイス・キャロルが変わり者だったことはよく知られているが、彼自身の「作法」に対する執着的なこだわりをも考え合わせると、アリスの冒険を単に珍奇なものとの出会いとして読むだけでは収まらなくなってくる。第4章ではそのあたりを、作法による束縛と、作法による解放という相反する二つの視点をまじえながら考えていく。

第5章から第7章では相手に対する「愛の表明」に焦点をあてる。組上に載せるのは、シェイクスピアの『ソネット集』、ナサニエル・ホーソーン『七破風の屋敷』、ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』である。『ソネット集』は特定の相手に「愛」を表明し、徹底的に相手を褒め、説得し、いわば口説こうとする。ホーソーンやエリオットでも、語り手と登場人物との間にはやや湿潤と言ってもいいような感情的な接近が読み取れる。重要なのは、こうした「愛の語り」が決して共同的な約束事と無関係でないことである。愛の表明が濃厚になればなるほど、制度による拘束の果た

す役割も大きくなる。ホーソンやエリオットのように時代が下っても、礼節の伝統は語りの中に生き、それが『七破風の屋敷』のように語り手が登場人物に遠慮したり、その前で失語症的になるという形で表現されることもあるし、『サイラス・マーナー』のように語り手が急に厳しく断罪的になることで示されることもある。いずれにしても登場人物に対する語り手の妙に愛情に満ちた、しかし、あくまで作法に忠実にもなろうとするような振る舞いが、作品世界に複雑な奥行きを与えるのである。

二〇世紀になると、文学作品の語りと礼節の関係はさらなる転換点を迎えることになる。第8章から第11章で扱う作家や詩人たちに共通して言えるのは、一九世紀以前とは善意や愛の表明がかなり異なっているということである。それまではイライラや不機嫌に犯されているとはいえ、少なくとも表向きは善意の構えをとることがある程度約束としてあった。ところがある時期から文学作品の語り手たちは、読者に対して積極的に不作法になったり無愛想になったり、ときには「読むな」と言わんばかりの態度をとることが増えてきた。D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』にしても、ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム!』にしても、読者を遠ざけようとするかのような姿勢が読み取れる。

しかし、これらが果たして「愛の語り」と無縁かというとはならない。むしろ、爛熟した善意の文化の中で、愛の表現は洗練の度を高めていった。すでに一八世紀から意識されていたように、善意や愛の表現には悪意やときには憎悪が混入することがある。二〇世紀の語りが自覚的に挑戦したのは、むしろ愛とは正反対のベクトルを持つかのような嫌悪や距離感を通してこそ、より奥行きのある愛の語りの成就だった。ロレンスにしてもフォークナーにしても、土地の匂いの漂う中で人間の濃密な絡み合いに表現を与えようと試みているが、そこには同時に、きわめて新しい語り手・読者関

係が生まれつつあった。

第10章で扱うのは、フランク・オコナーとウィリアム・トレヴァーの『冠婚葬祭小説』である。この章では二人の語り手が一人の対象を語るときに、その三角関係の中でどのような作法が働くかという問題について考えてみたい。冠婚葬祭の場では作法の縛りがきついが、その縛りを逆に生かした語りがありうるのである。しかも、そうした冠婚葬祭的拘束は、あらゆる語りの原点にあるものなのかもしれない。

最終章のウォレス・ステイブンズは私生活でも不機嫌と不作法で知られた人だった。保険会社の副社長でありながら、社交は下手で人ともほとんど交わらない。奥さんともうまくいっていなかった。そのステイブンズの詩は、案の定、にこやかに社交的なものではない。読者をよせつけないその詩の中には、与え、増やし、豊かにするという伝統的な詩学とは正反対の原理が読み取れる。与えるのではなく、奪う。増やすのではなく減らす。豊かにするのではなく、貧しくするのである。しかし、その原理を確認した上であらためてステイブンズの作品を読み直してみると、奪われ、減らされ、貧しくされているにもかかわらず、不思議な詩的邂逅の瞬間が用意されていることも見えてくる。

ステイブンズの詩でもっとも印象的なのは、これまで知っていたはずの言葉とまったく新しい出会い方ができるということである。近代文化の最大の急所であり、従ってさまざまな文学作品がもっとも力を注いだきたのも、新しいもの、見知らぬものといかに出遭うか、いかにそこに愛を注ぐかということだった。ステイブンズの作品は、まさにそのヒントを与えてくれるように思う。

なお、イギリス、アメリカ、アイルランドなど英語圏の作品を中心に本書では見ていくが、「インターロード1」と「インターロード2」ではそれぞれ江戸川乱歩と宮沢賢治をとりあげ、日本語にお

ける礼節や丁寧と愛の表現の問題を考える。とくに注目するのはですます調の使い方である。たとえば江戸川乱歩の『怪人二十面相』中にみられる語り手や怪人二十面相、明智探偵らの過剰に丁寧なですます調には、さまざまなニュアンスが読み取れる。読み手としての児童を意識したやわらかさや安心感だけではなく、語り一般にも共通する、愛する者としての語り手の姿勢がそこには見えるのである。同じようなことは宮沢賢治の、宗教性すら感じさせるですます調にも言える。同じく児童を読み手として想定している『銀河鉄道の夜』の文体には、不明なもの、わからないものを語ることを通して、畏怖の念のようなものを醸成しようとする姿勢が見てとれる。ただ、そこに宗教にしばしばつきまとう「裏切り」のファクターがあることも見逃せない。乱歩や賢治のですます調に注目することでそうした問題を考える端緒がつかめればと思う。

礼節そのものについても近年興味深い研究がなされている。とくにブラウンとレヴィンソンによって提示された「ボライトネス」概念に触発された考察は本書のテーマともつながるので、「あとがき」で触れる。興味のある方はあらかじめそちらにも目を通していただければと思う。